



八百万の神
Yaoyorozu-no-Kami

はじめに

筆者は古事記の神の役割やエピソードから、自身の感覚やイメージ、解釈でキャラクター化していくという方法で陶の作品を制作してきた。神を一柱一柱、それぞれの個性が出るよう工夫した。既存ではない新たなキャラクターであり、目には見えない筆者の曖昧な感覚がかたちになっている。作品を見てもらうからには筆者の考えが鑑賞者にも伝わってくれることを期待するが、鑑賞者の思考も十人十色で作品を見て様々な受け取り方をする。筆者が抱いたこの曖昧な感覚や解釈を、オリジナリティを保ったまま作品にするにはどうしたら良いのだろうか。

そこで人々と「共感」できる「らしさ」を本稿で探り、修了制作の作品《八百万の神》にその結果を活かすと共に、新たな神の形を提案することを目的とした。

第1章

人が造形対象にしてきたものは

人が造形対象にしてきたものにはどのようなものがあり、人はそれらをどのように表現してきたかを探った。

第1節

自然物・概念の表現方法

第1節では自然物・概念の表現方法を探り、対象物らしさはどのように表現することで生まれるのか調査した。調査対象は太陽、月・星、火、風、水、知恵、生・死、時間、愛それぞれをモチーフにした作品とした。

太陽や月・星形のような定まった自然物は形を保ったまま表現される傾向にある。火や水のような目に見えるが形が曖昧な自然物は目に写った様子を、また風のような目に見えない自然物は、そのものによって動かされた軌跡などで表現される傾向にある。知恵や生・死や時間や愛のような形のない概念はモチーフと関連したもの又は連想されるもので表現される傾向にある。

第2節

神話の神の表現方法

第2節では神の表現方法を調査した。

1) なぜ目に見えない神が人型で表される傾向があるのか。

第一に、元々目に見えない存在だった日本の神々を中世になり本地垂迹思想により「神を本地仏の姿＝人型」で表現するようになったため。第二に、現人神として王は神と同一又は神の子孫とされたり、王は神の代理とされるなどして神と王には深い関わりが存在し、古代王権は自らの権力を正当化するために、自分達の起源を記す神話を作ったとされ、神が人型であった方が都合が良いため。以上の理由により神が人型で表現される傾向にあると考えられる。特定の条件や状況が必要ない場合、神は人型で表す必要がないのかもしれない。

2) 神話の神はどんな姿で表されるのか。

日本・ギリシャ・エジプトの3神話から特定の自然物・概念を元にした神を選出し、それらの共通点を探った。形が定まった自然物は人型の神のどこかに、その自然物を模したアイテムで表される傾向にある。また形が曖昧な自然物や形のない概念には一定の表現は見つからなかった。これらには特定の形がなく地域や時代によって、対象から連想されるイメージが異なることがあるため一定の表現がなされないと考えた。

第2章

作家研究—岡本太郎—

民俗学に精通する岡本太郎の造形に対する思想を読み解くことで、頭の中にある形ない曖昧なものを形にする過程を客観視した。対象物「らしさ」を持ち合わせながらオリジナリティのある作品を作る方法を探った。

幼少期からの確立したアイデンティティと国際的な感覚が、彼の独創的な考えを作っていったと思われる。生育環境で培われた感覚や考え方が、のちの作品の独創性に繋がり誰もが知る作品となったのだろう。また彼の知識を持って表現することで陳腐ではない作品を作ることができると考えられる。共感されることに重きを置きすぎると、普遍的で面白味

のないものになってしまう恐れがあるが、らしさを抑えつつ、対象物のより深い解釈を作品に落とし込むことで、作品に確固たるオリジナリティが出ると考えた。

第3章「らしさ」と神の考察

共感される表現をするには、対象物が目に見えるのか、特定の形があるのかに注意する。このような場合は「らしさ」が様々にあるため表現する際に独りよがりにならないよう多面的に見る必要がある。

異文化の影響により、見えなかった神が人型として表される場合や、神が人型である方が権力者として都合が良いなどの理由がない場合、人型で表す必要がないため筆者は人型で表現しない。

研究報告書

研究内容を踏まえた修了作品《八百万の神》の制作過程及び、制作報告について述べた。

一つ目という筆者の作風を持ちながら、これまでの調査で得た「らしさ」の要因や神の姿の結果を踏まえて作品にした。それにより、独りよがりではない共感のある作品に仕上がったと考えられる。

おわりに

本論では「共感」できる「らしさ」を探り、修了制作の作品「八百万の神」にその結果を活かすと共に、新たな神の形を提案することを目的に述べた。結論として「らしさ」は対象物の普遍的要素であり、ある対象物に対して共感度の高い作品を作るには、その対象物の普遍的な要素（＝らしさ）を抑えつつ表現することが重要である。また現人神や王権神授説などの神と王の関係性が必要ないのであれば、神はどんな容姿で表しても問題がないと筆者は考えた。

そこで対象物の普遍的な要素（＝らしさ）を抑え共感されるものにしながら、一つ目という異質さで神らしさを表現して新たな「神」を提案した。